Ⅱ　遠隔画像診断の検査と診断の質の向上をめざして

2. 遠隔画像診断における検査の質の向上に向けて
2）質の高い遠隔画像診断を行うために――依頼施設から

永野　和寿　長崎県上対馬病院放射線科
立花　一憲　長崎県上対馬病院院長

長崎県の対馬は，日本で3番目に大きい離島である。南北に細長く，南端から北端までは車で2時間以上かかる。当院のある上対馬町は最も北に位置しており，条件が良ければ韓国の島々や釜山の夜景を肉眼で見ることができる（図1）。また，日本の渚百選に選ばれた「三宇田浜」や，韓国展望台など観光地も多数ある。春は，「ヒトツバタゴ」の白い花と，山々の鮮やかな緑とのコントラストが実に美しい（図2）。

当院は，対馬北部地域の一次医療から救急医療，そして急性期から慢性期にわたり，地域住民にとって必要不可欠な病院である。また，在宅医療にも力を入れており，訪問看護ステーション，訪問リハビリテーション，通所デイケアを併設し，地域に密着した医療を展開している。

本土よりはるかに進んだ超高齢化社会，過疎という厳しい現実の中で，対馬北部の地域住民のニーズに対応しうる中核的医療機関として，健康な町づくりに努めることを病院運営の基本方針としている。

遠隔画像診断システム導入の経緯

2011年10月，14年間使い続けたヘリカルCTを東芝メディカルシステムズ社製64列CT「Aquilion/CXL Edition」へ更新することとなり，併せてその大量のCT画像の保存と閲覧のために，同社製PACS「RapideyeCore」も導入し，フィルムレス化を果たした。

運用開始からほどなくして，専門医による遠隔画像診断システム導入の本格的な検討を行った。この先，医師確保が困難になり，医療サービスの質が低下することを憂慮していたためである。幸いハードウエアが遠隔画像診断に対応していたこともあり，わずかな追加投資でシステム導入を即断することができた。PACS運用開始から4か月後のことであった。

今思えば，医用画像がフィルムレス化となる大転換期であったにせよ，CT・PACSを導入する前に，画像診断のゴールである読影レポート記載を誰が行うのか，きちんと詰めて検討するべきだったと反省した。

僻地医療における遠隔画像診断の重要性

東芝メディカルシステムズ社の紹介により，イーメディカル東京遠隔画像診断センターとの契約に至り，現在，健診胸部X線写真（CR），およびCT（肺がんCT検診はすべて，それ以外は任意）を読影していただいている。導入後5年経過したが，常勤医の少ない（内科3名，小児科1名）当院にとって，心強い後方支援システムとして有効利用している。

遠隔画像診断の依頼操作はとても簡単で，撮影後のDICOMデータにPACS送信画面上で検査目的などの診療情報を加え，ADSL-VPN回線にて順次送信している。読影医のタイミング次第では当日中に，平均して翌日～翌々日には詳細な読影レポートが返信される（領域別に専門の医師が日替わりで担当するため）。急ぐ場合は，「至急」と入力すれば，ほかより優先して読影していただいている。

当院では，担当医の専門領域であったとしても，悪性腫瘍などのQOLに影響する疾患に関しては，ダブルチェック目的で依頼するケースがほとんどである。また，単に読影のみならず，必要に応じて「○か月後にフォローアップCTを」「○○（他モダリティ）での精査を」などといった指導コメントも付け加えていただいている。

遠隔画像診断の重要性を語る上で，次のシステム導入効果が挙げられる。

図1　対馬の位置
韓国まで50kmと近く「国境の島」と呼ばれている。

図2　長崎県上対馬病院と満開のヒトツバタゴ